

藤原宮・京出土の紡織具

浦 蓉子

I はじめに

1985年に奈良文化財研究所が刊行した『木器集成図録近畿古代篇』において収録されている飛鳥・藤原地域の紡織具は、坂田寺跡SG100出土の糸杼1点、伝飛鳥板葺宮SD6612出土の杼木1点、紀寺跡SK04出土の横木2点の事例にとどまる。以降、近年までの調査で藤原宮・京から数十点の紡織具が見つかっている。新たな事例を報告することで、紡織具の変遷をより詳細に把握することが可能となり、律令制下の織物生産における、布・絹生産の実態解明に資すると考えた。そこで、奈良文化財研究所の藤原宮・京から出土した紡織具の未報告資料について、観察表の作成と図面の作成をおこなった¹。

なお、各遺物が出土した遺構については、発掘調査概報や紀要、『木器集成図録—飛鳥藤原篇 I—』を参照した。

II 藤原宮・京出土紡織具の器種

紡織具には、主に製糸工程で用いられる紡錘車、杼や糸枠、製織工程で用いられる総かけ、糸枠や織機などがある（図1）。

1 系 枢

糸枠は、中央の孔に棒軸を差し込み「回転を利用して、縦かけにかけた糸を巻き、小分けにする道具」である（東村2004）。糸枠の構造は、横木2本を十字に組んだもの2つを、枠木4本と結合するもので、横木の中心部には軸棒を通す孔があく。『木器集成図録—近畿古代篇』では、糸枠は数本の枠木とそれを固定する横木、横木の心にとおす軸棒からなる。糸枠は枠木が4本からなるA型式と、6本枠木が単体で出上した場合には、枠木が6本で

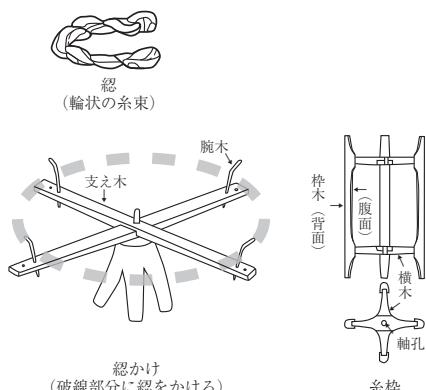


図1 総と生産用具の各部名称

かを区別することは難しい。

枠木は形状から4つに大別され、I：断面が円形に近い棒状につくるもの、II：枠木の腹面を平坦にして断面がカマボコ状を呈し、横木の結合部から両端に向かって斜めに削込むもの、III：IIの2箇所結合部分間に浅い削形をいれるもの、IV：IIIの形態をとるが、両端の側面形を刀身状に尖らせたもの、がある。また、枠木の長さによって小型（16cm前後のもの）、中型（24～28cmのもの）、大型（32cm以上）に区分できる（町田編1985：p.22）。一方で、これらの分類に当てはまらないものの出土も増えており、東村純子氏によって枠木の形状と横木を結合する孔の形状で分類がなされた（東村2011）。a：2つの横木との結合部間に削り込みを入れる、b：横木殿結合部から両端に向かい斜めに削る、c：両端部を腹面側から背面側へ尖らせる、の3つの要素に円孔か方孔かの5つの属性を組み合わせて分類している。

横木は、板の中央を広く残し、両端を棒状に削り出して枝部を作る。中央部分には相欠き仕口をもうけ、2点を組み合わせる。組み合わせた中央部分には軸孔をあける（図1）。

なお、東村氏の検討によると糸枠の枠木と横木には相関関係があることが示されており、以下の分類が提示されている（東村2011：p.53）。大型：枠木の長さが30cm以上、横木の長さが約14cm以上、軸孔は直径約2～4cm。中型：枠木の長さが30cm未満、横木の長さが9～12cm程、軸孔は直径約0.5～1cm。小型：枠木の長さが約16cm、横木の長さが約5cm、軸孔は直径約0.3～0.4cm。

本稿ではこれにならい糸枠の大型、中型、小型を区分する。

2 総かけ

総かけとは、糸束である総を保持し、回転させて糸を引き出しやすくする道具である。2本の支え木を十字に組み、回転軸を持つ台に乗せたもので、支え木の四隅に差し込んだ腕木部分に輪状の糸束である総をかける。東村氏は支え木の分類に、中央の軸孔から腕木を差す小孔までの距離を用いている。軸孔から小孔までの距離が短いものを絹糸用、長いものを植物性纖維用とする（東村2011：p.44）。

3 紡錘

紡錘は、回転運動によって素材の纖維に撲りをかけて、丈夫な糸を作る道具である。紡輪は円盤状の紡輪（紡錘車）と回転軸である紡茎からなる（上原1993：p.111）。ただし、紡茎は断面円形の棒のため、紡輪と分離した場合、認定が難しいため、報告対象には含めていない。

本稿では、以上の3器種について報告する。

III 藤原宮出土の紡織具

①藤原宮北面中門 北面外濠SD145下層（飛鳥藤原第18次調査） 7世紀末～8世紀初頭

藤原宮北面大垣の外濠（SD145）の下層からは、糸枠の枠木と横木、それぞれの未成品4点が出土した。下層から出土した木製品は藤原宮期にあたる694～710年頃の遺物である。図3-1は糸枠横木の未成品。横木の組み合わせ部分を相欠き仕口状に調整する。加工した際の刃物傷が数条残る。縦木との結合部分は、緩やかに形を作り出すが、未調整で断面は四角形である。また、棒軸を通すための孔も未穿孔である。裏面には刃物による加工痕跡が明瞭に確認できる。図3-9は下半を折損するが、軸孔の中心で折り返すと復元長6.6cmとなる。小型。中央には棒軸を通すための孔があけられている。孔の直径は0.6cm。枠木と組み合わせるための突起は0.6×0.8cmと小さく、短い。図4-1は糸枠縦木。下端は

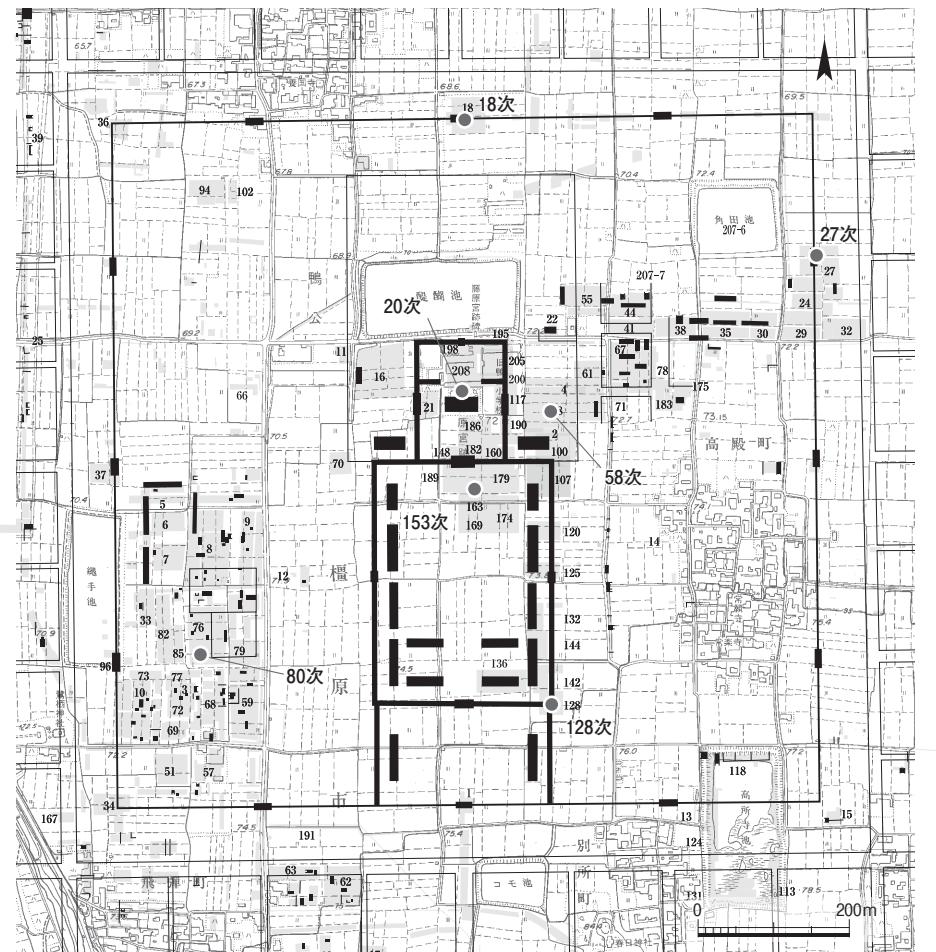


図2 藤原宮出土紡織具地点 1:10,000

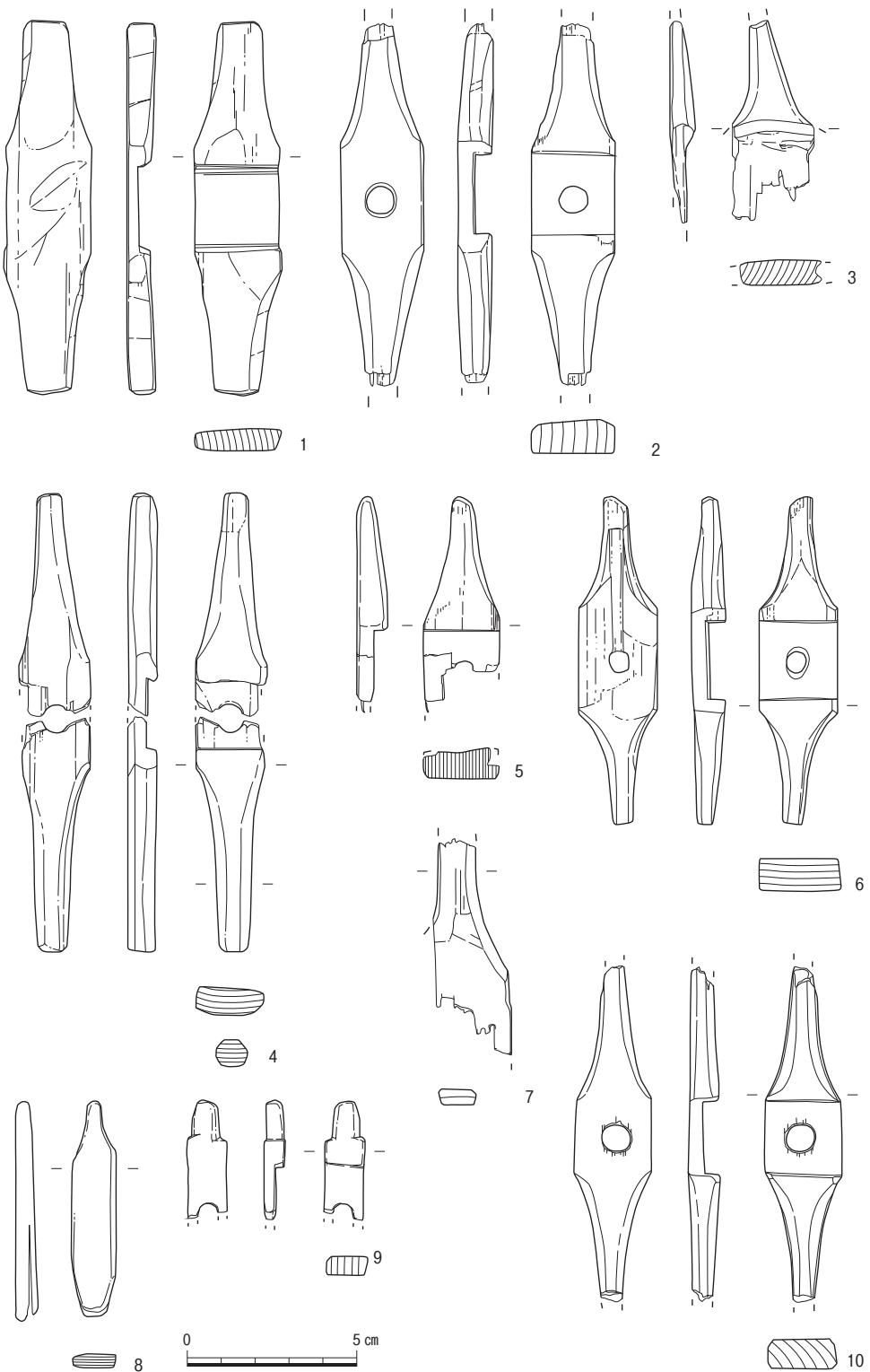


図3 糸梓横木 1:2

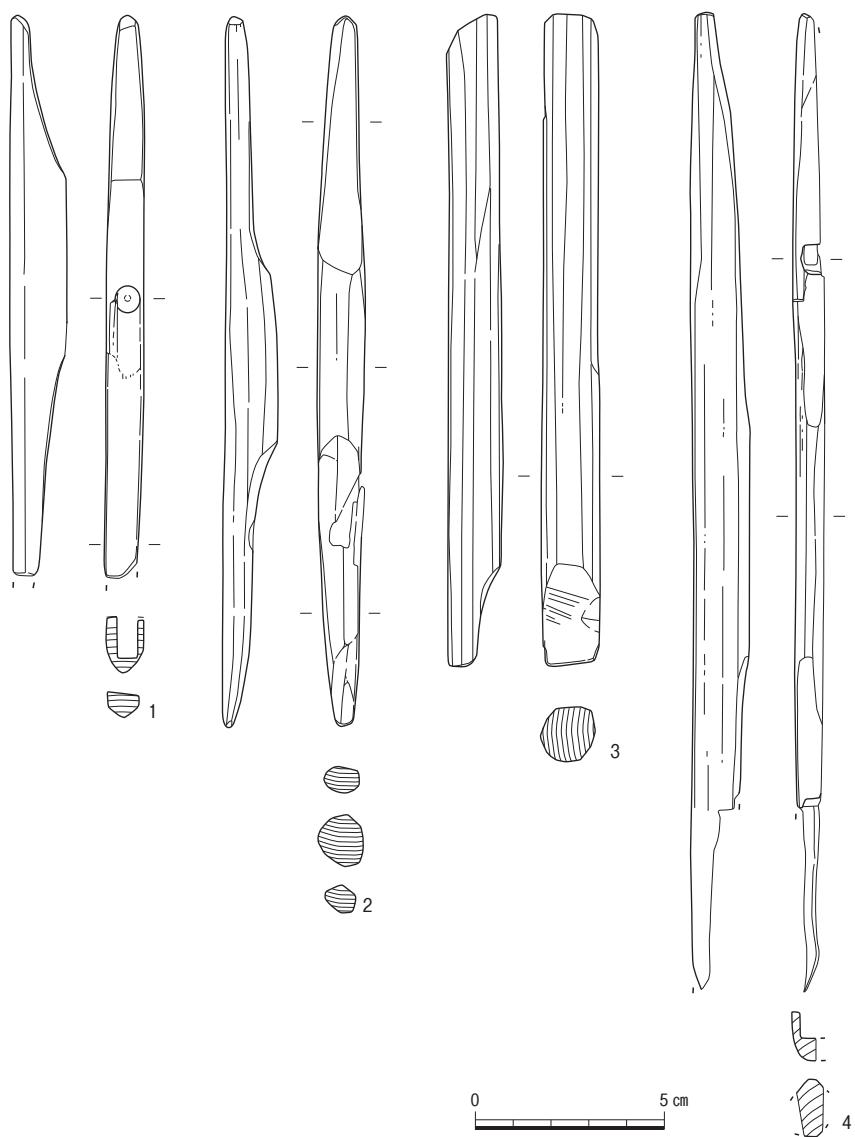


図4 糸杵杵木 1:2

折損する。上端の側面形を刀身状に尖らせている。横木を結合するための柄孔は、鼠刀錐によつて円柱状に穿孔される。孔の直径は0.6~0.7cm。柄孔から下端にむかって、ゆるやかに削り込む。欠損部分で折り返して長さを復元すると29.6cmとなり、中型となる。図4-2は糸杵縦木の未成品と考えられる。両端を丁寧に削り出し、刀身状に尖らせている。横木を結合するための柄孔は未穿孔である。全長は18.8cm。

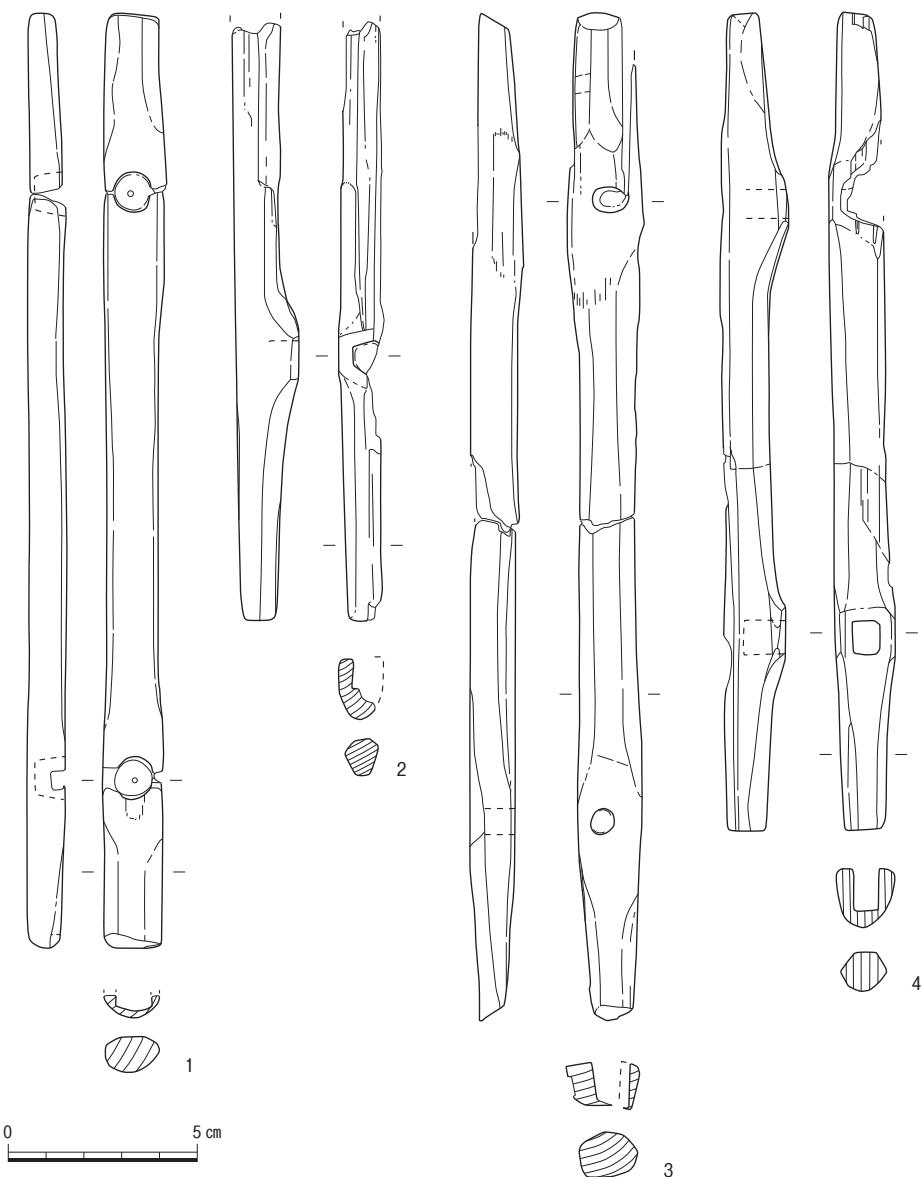


図5 糸杵杵木 1:2

②藤原宮大極殿院 運河SD1901A下層（飛鳥藤原第20次、第153次調査） 7世紀後半

運河SD1901Aは、藤原宮の中軸線付近を南北に通る素掘りの大溝で、宮造営に関わる資材運搬用の運河である。紡織具は大極殿北の飛鳥・藤原第20次調査区と、大極殿より南の飛鳥・藤原第153次調査区の2か所で見つかった。図4-3は、全体的に面取りが施された多角棒。上端、下端ともに切断されるが、形状が異なる。上端は斜めに切断され、下端

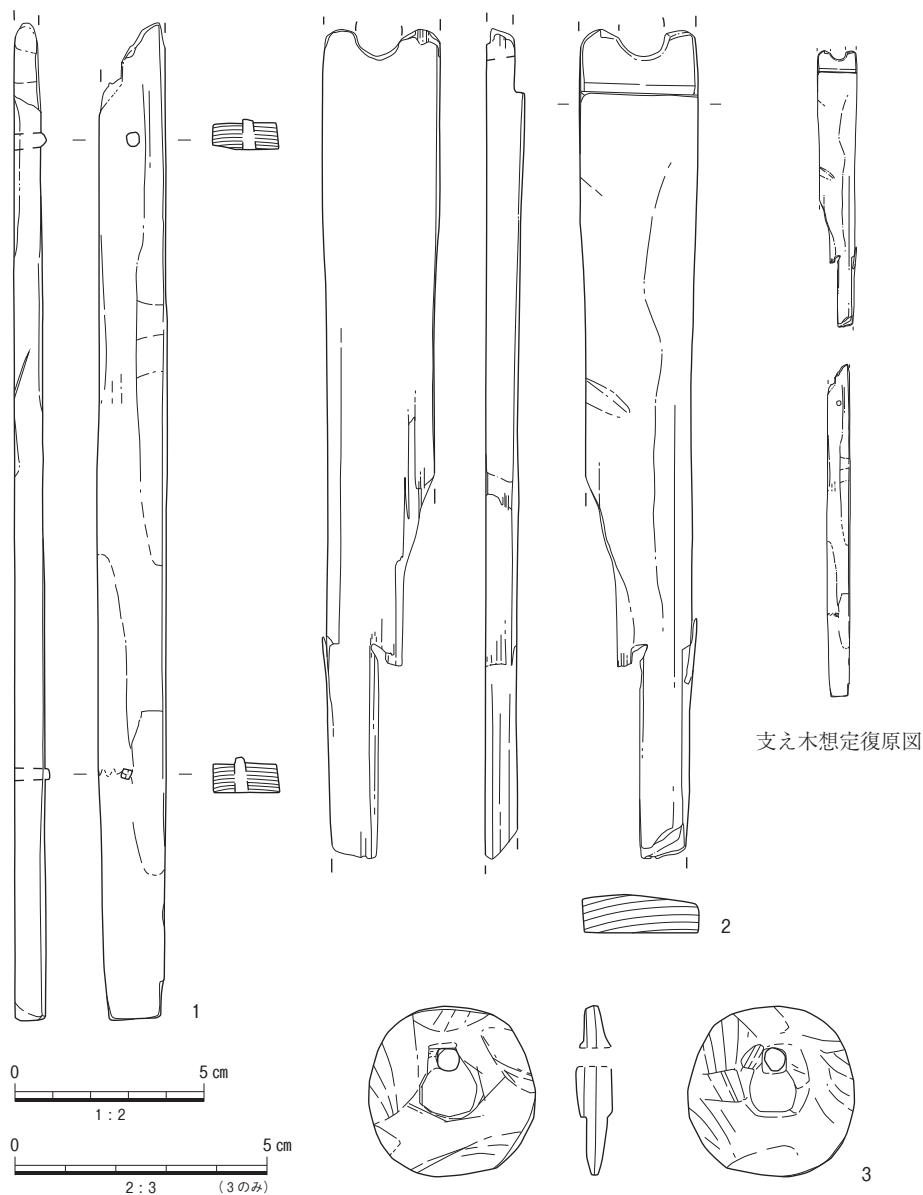


図6 結かけと紡輪

は側面形が刀身状に加工される。糸杵杵木の未成品の可能性がある。横木を結合するための孔は未穿孔。図4-2と同様に短い。

図3-10は、糸杵横木。枝部の両端を折損する。残存長は9.8cmで、相欠き仕口の中央には、直径0.9cmの軸孔があく。中型に属する。幅広の中央部分から両端の枝部にかけては緩やかに減少し、角の面取りがなされる。ヒノキ²。

③藤原宮東面北門 外濠SD170下層（飛鳥藤原第27次調査） 7世紀末～8世紀初頭

外濠SD170は藤原宮東面大垣の外濠である素掘り溝である。下層から糸枠の枠木が出土した（図4-4）。下端を折損する。残存長25.8cm。先端の側面形は刀身状に削り出す。横木を結合するための孔は四角形で、縦0.6cm×横0.4cmである。下端の折損部分を上端の孔から先端部までと同様の長さで復元すると、全長約27.6cmに復元でき、中型となる。

④藤原宮内裏東官衙 内裏東大溝SD105中層（飛鳥藤原第58次調査） 7世紀末～8世紀初頭

内裏東大溝SD105は内裏東官衙地区を区画する南北溝である。溝の中層から総かけの支え木2点が出土した。図6-1は残存長26.4cm、幅1.8cm、厚さ0.8cmで、断面が長方形の棒状品である。総かけの支え木の先端部分と認定した。一端は切断される。表裏面ともに平滑に加工され、加工痕跡が残る。両側面も平滑に加工される。2か所に直径0.3cmの木釘と、0.2cmの角木釘が打ち込まれる。木釘は貫通し裏面に達する。また、木釘は上端を折損するため、全長をとどめていない。木釘間距離は約16.8cm。木釘は腕木として機能していた可能性がある。図6-2は総かけの支え木。中央部分から両端を折損する。中央の軸孔も折損し、直径1.2cm以上。相欠き仕口部分の幅は、3.1cmで圧痕が残る。上面には加工痕跡がよく残り、ゆるやかなカマボコ状を呈する。下面は平坦で、平滑であるが加工痕跡は明瞭には観察できない。幅は下端に向かって緩やかに減じる。

なお、この2点は同一層位から出土しており、ともに板目であることから、同一個体の可能性があるものの、接合しない。これらが同一個体であれば、平面形態は東村氏のⅡ類、「中央部から端部にかけて徐々に幅が狭くなるもの（端部の幅は中央部の幅の約90%以下）」に該当する。

⑤藤原宮西方官衙 土坑SK8471（飛鳥藤原第80次調査） 7世紀後半

土坑SK8471は調査区の中央北よりで検出された、直径4.6m、深さ1.3mのすり鉢状の土坑である（荒木ほか1996：pp.20-40）。土坑からは端部を折損した横木と完形の枠木が出土した。図3-2は両端を折損し、残存長は10.7cm。軸孔は直径0.9～1.0cmで、中型に属する。相欠き部分は垂直に加工される。図5-1は全長23.7cmで中型に属する。横木の結合部間、横木の結合部分から端部にかけてはともに緩やかな削り込みがある。断面形態は扁平である。横木を結合する枘孔は円形で、中心にへこみがあり鼠刃錐で円筒形にあけたと考えられる。孔の直径は約1.0cmである。

⑥藤原宮朝堂院回廊東南部 南北大溝SD9815 第2層（飛鳥藤原第128次調査） 8世紀初頭

南北大溝SD9815は、朝堂院の東面回廊の東雨落溝の東側で検出された大溝。幅約2.5m、

深さ0.5mで、南端付近で氾濫原状に広がる。第2層からは年紀を記す木簡が出土しており、木簡の年代は8世紀初頭ごろが中心とされる（箱崎ほか2004：pp.90-99）。溝からは、紡輪が1点出土している（図6-3）。直径は3.3cm×3.4cm、厚さは0.7cm。板目。表裏面ともに中央部分が膨らむ。紡茎を通す軸孔は中心から外れた部分に穿たれる。軸孔の直径は0.5cm。

IV 藤原京出土の紡織具

①藤原京左京十二条三坊 東西溝SD2740B下層（飛鳥藤原第66-13次調査） 7世紀末～8世紀

初頭

東西溝SD2740は幅6mほどで、杭や石の護岸を持つ溝である。糸枠の横木が4点、枠木が1点出土した。

図3-4は全長13.4cm。2片に割れているものの、軸孔が円となるように配置し、全長を計測した。中央の軸孔は、復元径0.9cm。他の横木より長く、幅が2.1cmと狭いが、中型の範疇に収まる。他の横木はいずれも折損しており、全長は不明である。ただし、それぞれ木取りが異なるため、別個体であると認定できる。図3-3は枠木との結合部分が斜めに作り出される。相欠き仕口の仕口部分も垂直に加工されておらず、仕口部分に加工痕跡が残る。他の横木と異なる特徴をもつ。残存長5.9cm。追柾目。図3-5は残存長6.1cm。相欠き仕口部分は垂直に加工され、直線的な刃物痕跡が残る。柾目。図3-8は全長5.4cmで小型に属する。軸孔は穿孔されておらず、また相欠き仕口も未加工であることから、未成品の可能性がある。大きさは図3-9に似る。図5-2は残存長15.8cm。一端を折損し、横木を結合する柄穴は1点のみ残る。また、柄穴自体も折損が激しく、計測は不可能であった。横木の結合部間、横木の結合部分から端部にかけて、ともに削り込みをほどこす。端部の断面形態は、円形に近い。

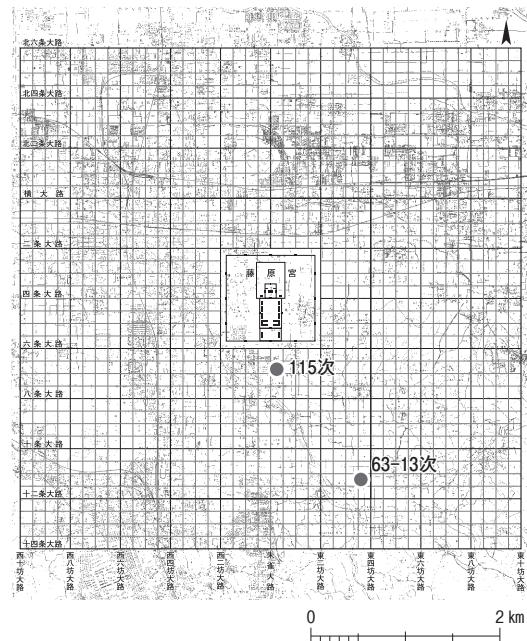


図7 藤原京出土紡織具地点 1:80,000

②藤原京左京七条一坊 池状遺構SX501下層ほか（飛鳥藤原第115次調査） 7世紀末葉～8世紀

初頭ほか

左京七条一坊は藤原宮の南面に位置し、西が朱雀大路に接する。左京七条一坊の池状遺構からは1万点を超える多量の木簡が出土しており、「大宝元年（701）」や「大宝二年（702）」などの紀年銘木簡が出土する。木簡の内容からは、衛門府の本司が置かれていたとされる。また、木簡の中には「糸」に関する内容をもつものが数点出土している（内田ほか2002：pp.58-64）。

図3-6は完形の糸枠横木。全長9.7cm、軸孔は0.5～0.6cmで中型に属する。図3-7は形状から糸枠の横木と認定できるが、1/2以上を折損する。図5-3は全長26.6cmで中型に属する。横木の結合部間には削り込みはなく、横木の結合部分から端部にかけて緩やかに削り込み、両端部を斜めに切断する。端部の断面形状は円形に近い。横木を結合する枘孔は円形で、直径約0.6cm。図5-4は全長21.6cmで中型に属する。横木の結合部間、横木の結合部分から端部にかけて削り込みをほどこす。端部の断面形状は円形に近い多角形である。横木を結合するための枘孔は方形で、縦0.9×横0.8cm。他にも写真図版のみの掲載であるが紡輪が2点出土した。1点は円周状の1か所を切り欠く。直径5.3cm×5.8cm。もう1点は直径6.0cm×5.2cmである（カラー図版PL.5参照）。

V おわりに —資料の位置づけと今後の課題—

本報告では、藤原宮・京出土の紡織具について、遺物の法量と図、写真を提示した。糸枠の横木は端部を折損するものが多く、全長は不明であるが、概ね中型の糸枠にともなうものと認定できる。また、横木の法量に着目すると幅や厚さ、軸孔の大きさが似通っている。藤原宮内、京内にかかわらず、一定の規格性があったことがうかがえる。北面外濠SD145下層から出土した横木未成品（図3-1）も、中型の横木を作るためのもので、完成品に近いところまで成形されていたことがわかる。枠木に関しても、横木を結合する枘孔を穿つためか、幅については1.6～1.7cmとある程度一定であることがわかった。藤原宮・京で出土する糸枠は、遺構に時期差がほとんどないためか、横木に関しては非常に規格性が高いことを指摘することができる。また、枠木についても幅を厚みに一定の共通性がうかがえるが、横木の結合部分から端部にかけてはいくつかの形状を確認することができた。

今後の課題としては、藤原京左京七条一坊では同一遺構で近接して「糸」に関する木簡と糸枠とが出土しており、その関係性についても検討が必要である。あわせて、樹種同定をおこない用材傾向などを把握し、平城宮・京の紡織具との比較についても今後の課題としたい。

表1 観察表

ID	遺物	次数	地区	中小地区	遺構	層位	日付	長cm	幅cm	厚cm	孔径cm	木取り	図版番号
1	糸棒轆木	18	6AJE	KN35	SD145	第IV層	19750801 (3.5)	1.2	0.6	直径0.6		柾目	図3-9
2	糸棒轆木	18	6AJE	KM33	SD145	第IV層	19750729 (14.8)	1.6	1.0	直径0.6~0.7		割材削出	図4-1
3	糸棒轆木(未成品)	18	6AJE	KM34	SD145	第IV層	19750731	18.8	1.4	1.2	—	割材削出	図4-2
4	糸棒轆木(未成品)	18	6AJE	KM34	SD145	第IV層	19750731	11.0	2.6	0.9	—	追柾目	図3-1
5	糸棒轆木(未成品?)	20	6AJF	KO33	大溝砂	—	19770513	17.2	1.7	1.4	—	割材削出	図4-3
6	糸棒轆木	27	6AJB	PK29	溝1	砂	19791215 (25.8)	1.6	(0.8)	縦0.6×横0.4の四角い孔		割材削出	図4-4
7	糸棒轆木	58	6AJF	DP62	SD102	暗灰粘土	19881028 (26.4)	1.8	0.8	—		板目	図6-1
8	縦かわ支え木	58	6AJF	DE63	SD102	暗灰粘土	19881118 (21.9)	3.1	1.0	折損する、直径1.2cm以上		板目	図6-2
9	糸棒轆木	80	5AJG	SI79	土坑	青灰粘土	19951219	23.7	1.7	1.0	上部1.0×1.0、下穴1.0×1.1	割材削出	図5-1
10	糸棒轆木	80	5AJG	SI79	土坑	青灰粘質土	19951221 (10.7)	2.4	1.0	直径0.9		柾目	図3-2
11	4532 紡輪	128	5AJG	EF70	東西大溝	第2層	20030714	3.4	3.3	0.7	0.5	板目	図6-3
12	2766 糸棒轆木	153	5AJF	NI34	運河	砂層	20080916 (9.8)	2.3	0.9	直径0.9		追柾目	図3-10
13	9934 糸棒轆木	66-13 6AMH	JW65	東西大溝	青灰色粘土	19920130 (15.8)	(1.3)	1.6	—		割材削出	図5-2	
14	9986 糸棒轆木	66-13 6AMH	JA66	東西大溝	青灰色砂	19920303 (6.1)	2.3	0.9	折損		柾目	図3-5	
15	9982 糸棒轆木	66-13 6AMH	QA16	東西大溝	青灰色砂質土	19920205	5.4	1.4	0.6	—	板目	図3-8	
16	9892 糸棒轆木	66-13 6AMH	JA67	東西大溝	青灰色砂	19920303 (5.9)	(2.4)	0.8	折損		追柾目	図3-3	
17	9971 糸棒轆木	66-13 6AMH	QW15	東西大溝	青灰色粘土	19920130	13.5	2.1	0.9	復元0.9	板目	図3-4	
18	409 糸棒轆木	115	5AWH	HH14	断割	下層木屑	20010918	9.7	2.3	1.0	直径0.5~0.6	板目	図3-7
19	295-296 糸棒轆木	115	5AWH	HG14	穴1	断割	20010625	26.6	1.7	1.3	0.6×0.7	割材削出	図5-3
20	6・7 糸棒轆木	115	5AWH	HJ15	沼E	暗灰土	20010508	21.6	1.7	1.7	縦0.9×横0.8の四角い孔	割材削出	図5-4
21	674 糸棒轆木	115	5AWH	HI16	沼E	木屑層	20010525	(6.4)	(2.4)	(0.5)	折損	板目	図3-6
22	8 紡輪	115	5AWH	HI16	沼E	暗灰砂質土	20010525	5.3	5.8	0.6	中央の孔は貫通しない	板目	カラー図版のみ
23	508 紡輪	115	5AWH	HM18	—	茶灰砂粘	20010808	6.0	5.2	0.8		板目	カラー図版のみ

註

- 1 石神遺跡出土例については、これまでに「石神遺跡（第15次）の調査—第122次」（石橋ほか2003）、「石神遺跡（第16次）の調査—第129次」（内田ほか2004）、等で報告済みの資料もあるが、今回の報告対象には含めていない。
- 2 図3-2の糸枠は『奈良文化財研究所紀要』にて報告済みであり、その際に樹種同定がおこなわれた（玉田ほか2009）。今回、断面図を加筆し、木取りを加筆した図を作成した。

参考文献

- 荒木浩司ほか 1996 「西方官衛南地区の調査 第79次・第80次」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報26』 奈良文化財研究所 pp.20-40
- 石橋茂登ほか 2003 「石神遺跡（第15次）の調査—第122次」『奈良文化財研究所紀要2003』 奈良文化財研究所 pp.114-130
- 上原真人編 1993 『木器集成図録—近畿原始篇一』 奈良文化財研究所
- 内田和伸・小池伸彦ほか 2002 「左京七条一坊の調査—第115次調査」『奈良文化財研究所紀要2002』 奈良文化財研究所 pp.58-64
- 内田和伸ほか 2004 「石神遺跡（第16次）の調査—第129次」『奈良文化財研究所紀要2004』 奈良文化財研究所 pp.106-117
- 浦蓉子 2021 「平城宮・京出土の紡織具」『考古学ジャーナル』 ニュー・サイエンス社
- 玉田芳英ほか 2009 「朝堂院の調査—第153次調査」『奈良文化財研究所紀要2009』 奈良文化財研究所 pp.50-61
- 箱崎和久ほか 2004 「朝堂院東南隅・朝集殿院東北隅の調査—第128次調査」『奈良文化財研究所紀要2004』 奈良文化財研究所 pp.90-99
- 東村純子 2004 「古代日本の紡織体制—棒・縦かけ・糸枠の分析から」『史林』87-5 pp.44-45
- 東村純子 2011 『考古学からみた古代日本の紡織』 六一書房
- 町田章・上原真人編 1985 『木器集成図録—近畿古代篇一』 奈良文化財研究所
- 和田一之輔編 2019 『木器集成図録—飛鳥藤原篇I—』 奈良文化財研究所史料第92冊 奈良文化財研究所

挿図出典

図1：東村2004の図1および東村2011の第13図をトレースして加筆

図2～7：筆者作成

カラー図版PL.5：奈良文化財研究所撮影